

3D graph structure extraction of the gallery regions for X-ray CT images of wooden statues of buddha

Junko Iwamoto, Kazunori Kotani, Yukiko Kenmochi, Ichiro Nagasawa

► To cite this version:

Junko Iwamoto, Kazunori Kotani, Yukiko Kenmochi, Ichiro Nagasawa. 3D graph structure extraction of the gallery regions for X-ray CT images of wooden statues of buddha. Journal of ITE (Institute of Image Information and Television Engineers) (Japanese Edition), The Institute of Image Information and Television Engineers, 2004, 58 (4), pp.514-521. hal-00622244

HAL Id: hal-00622244

<https://hal-upec-upem.archives-ouvertes.fr/hal-00622244>

Submitted on 13 Aug 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

木造仏像の X 線 CT 画像からの 虫食い領域の 3D グラフ構造抽出

3D graph structure extraction of the gallery regions
for X-ray CT images of Wooden statues of Buddha

岩本 純子[†], 正会員 小谷 一孔[†], 剣持 雪子^{††}, 長澤 市郎^{†††}

Junko Iwamoto[†], Kazunori Kotani[†], Yukiko Kenmochi^{††} and Ichirou Nagasawa^{†††}

Abstract This paper presents a new method for extracting the 3D graph structure of gallery regions (worm-eaten areas) from X-ray CT images of Wooden statues of Buddha. The extraction and analysis of gallery regions by image processing is indispensable in the restoration of historic and precious Wooden statues of Buddha. Our new method consists of two major parts: extraction of the initial 3D graph structure and its correction. Because the local shape of the statues and the gallery regions can be similar, extraction of the gallery regions can create extraction errors in the initial 3D graph structures. The second parts of our method corrects both of miss-extractions and unsuitable extractions satisfactorily based on their local and global features. Our method can extract the 3D graph structures of gallery regions with high accuracy, and it also can be used to visualize these regions by using extracted graph data.

キーワード：木造仏像，虫食い，X 線 CT，図形融合，3D グラフ構造

1. ま え が き

文化財は文化の継承のため，後世へ残すべきものである。中でも仏像など日本の仏教美術の遺品の殆んどは木造であり，その組成や構造ゆえに損傷しやすく高度な保存・修復技術が必要である¹⁾²⁾。保存や修復が特に必要な文化財クラスの仏像の数は 15 万体に上ると言われているが，修復作業を行う仏師には後継者不足，経験豊富な仏師の不足という問題があり³⁾，工学的な支援が必要とされている^{1)~5)}。

これまで仏像の損傷の調査は，記録写真撮影や X 線撮影した画像を解析し，破損，欠落，内部の釘の位置などから仏師ら修復担当者が損傷の状態（損傷度と呼ぶ）を判断していた。損傷の中で木材内部の虫食いは頻度，損傷度共に高いが，内部にある虫食いの状態は把握できず，修復は手探

りで行われており，十分な修復は難しいのが現状である¹⁾。

このような虫食いによる損傷の診断と修復作業を画像処理技術によって支援できれば，仏像修復作業の精度向上や大幅な効率向上が期待できる。例えば仏像内部の診断に医療で用いられている X 線 CT を用いて内部を可視化するだけではなく⁴⁾，虫食い穴の 3 次元的なつながり（分岐や合流の位置や数など）や大きさなど，虫食い構造特徴を詳細に抽出・記述することで精度・効率の良い修復が可能となり，定量的な診断も期待できる。

本稿では仏像の X 線 CT 画像から虫食い領域を抽出し，3 次元グラフ (3D グラフ) で記述して構造特徴を解析することを試みる。特に本手法ではグラフの各ノードに，虫食い穴の位置情報だけでなく穴の直径など幾何情報を持たせ，仏像形状と虫食い穴の局所的，大局的特徴に基づいてグラフ構造抽出の誤りを修正して仏像修復に重要な虫食い領域の詳細な構造特徴を解析・記述する。更に，本手法の 3D グラフは，虫食い構造のトポロジカルな情報と幾何情報とを有するため，仏像の診断と修復時に重要な虫食い穴の詳細な可視化が可能である⁶⁾。

2. 虫食い構造の特徴と修復作業

仏師や修復を行っている人から聞き取り調査を行ない，虫食い構造の特徴と修復作業の現状，問題点を調べた。

2003

[†] 北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科

(〒 923-1211 石川県能美郡辰口町旭台 1-1)

^{††} 岡山大学工学部情報工学科

(〒 700-8530 岡山市津島中 3-1-1)

^{†††} 東京芸術大学 美術研究科

(〒 110-8714 東京都台東区上野公園 12-8)

[†] Japan Advanced Institute of Science and Technology

(1-1 Asahidai Tatsunokuchi-machi Ishikawa 923-1292, Japan)

^{††} Okayama University

(3-1-1 Tsushimanaka Okayama-city Okayama 700-8530, Japan)

^{†††} Tokyo National University of Fine Arts & Music

(12-8 Ueno Kouen Taito-ku Tokyo 110-8714, Japan)

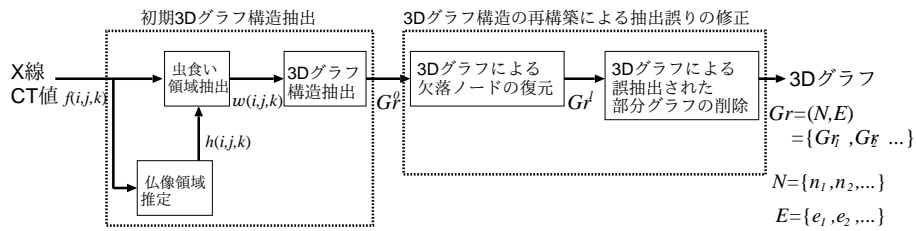


図 1 虫食い領域のグラフ構造抽出システム
The system of graph structure extraction for gallery regions

2.1 虫食い構造の特徴

虫食い穴の形状には次のような特徴がある。

- (1) 虫の種類や木の材質（固い，軟らかい）によって穴の直径は $0.1 - 3[mm]$ 程度の範囲にある。
- (2) 虫は木材を食いながら進むので跡は管状になる。
- (3) 虫食いの位置は木材の軟らかい部分や設置された場所で陰になった部分，底や背面など他の木材に接する部分など不特定多数となる。
- (4) 木造仏像内部で虫食いが進む方向には規則性はなく，直進，蛇行，ループをつくるなど複雑な経路を残す。複数の虫が食うため管状の経路には分岐や合流が発生し，経路が集中すると木材がスポンジ状になって強度が低下し崩落するなどして大きな空洞を残すことがある。

2.2 修復作業の現状と問題点

虫食いが起きた仏像を放置すると強度低下による崩落などが生じたり，木材の風化によって形状を維持することさえ困難になる。このため，次のような修復が主に行なわれる。

- (1) 欠落部分に補材（できれば古材）を継ぎ足して整形し，表面に紙や金箔を張ったり，古色を施す。
 - (2) 木材内部に固化する液状の薬剤を充填する。
- (1) は他の外観から確認できる損傷（部品の消失や欠損）と同様に調査や診断，修復を行う。(2) は直径 $1[mm]$ 程度の穴から処置を行なうが，その際，

- 穴の体積に応じた充填剤の量
- 穴の密度，構造特徴に応じた充填剤の種類や粘度

を正しく決定しないと，充填剤の過不足，合わない粘度の充填剤を無理に注入して木材を痛めるなど，不完全な修復に終ることもある。充填剤は固化するため再充填は難しく，事前に虫食いの構造特徴などの情報を得ておくことが不可欠である。しかしながら，外観から虫食いの特徴を観察することが不可能であり，内部を調べるための X 線撮影では 2 次元平面に投影された陰影となるので X 線吸収係数の大きく異なる金属性の釘や，崩落により大きな空洞になった穴の位置などは確認できるものの，数ミリの虫食いは観察できない。このため，虫食いの損傷の診断，修復は熟練した仏師らの経験に頼らざるを得ないが，このような仏師の数は修復を待つ仏像の数に比して極めて少なく，練度のみを頼っているのは修復が遅々として進まないのが現状である。

このため，内部の状態を 3 次元的に可視化し，その構造

を解析，記述する工学的サポートが強く望まれていた。似たような状況として医療における人体内部の状態や構造を可視化する X 線 CT 撮影，解析がある⁷⁾。特に管状の構造解析として医用画像では気管支，血管の解析がある。これらは人体の解剖学的知識を領域抽出や解析に利用している。しかしながら虫食いは人体の場合と異なり，①背景と連結しており②凹部は虫食いと外形によるものが混在している。さらに分布には規則性がなく，複数の虫食いが集中して複雑な形状になっているものが多い。このような特徴から既存の医用画像解析を適用することはできない。

本研究では木造仏像を X 線 CT 撮影し，内部の虫食い穴の形状，構造を仏像形状と虫食い穴の局所的，大局的構造特徴に基づいて高い精度で構造解析・記述・可視化する方法を与える。

3. 虫食い領域の初期 3D グラフ構造抽出

X 線 CT 画像から仏像内の虫食い領域のグラフ構造を抽出するために，まず CT 画像の特徴を解析し，仏像領域と背景，虫食い領域を分離しなければならない。本章ではこれら領域分離，推定手法とグラフ構造抽出アルゴリズム (図 1 の前半部分) について示す。

3.1 木造仏像の X 線 CT 画像の特徴

図 2(a)-(d) に仏像の外観，CT 画像列とスライスの一部を拡大したもの，CT 値* のヒストグラムを示す。図 2(c)，(d) より木材と空気の CT 値は大きく異なり，ヒストグラムは双方性のピークを持つことがわかる。

3.2 仏像領域推定

領域抽出手法には多くの手法があるが，仏像の外形の凹凸と虫食い穴による凹凸が混在した複雑な形状において，CT 値による閾値処理等により，空気領域中の背景と虫食い領域を分離するのは困難である。このため虫食い領域を含む仏像領域を推定する必要がある。ここでは 3 次元図形融合⁹⁾により虫食い穴を塞いで仏像領域を推定する。3 次元図形融合には拡大 → 縮小と縮小 → 拡大の膨張・収縮処理の組合せがあるが¹⁰⁾，縮小 → 拡大処理は仏像内部の虫食い穴が拡大し，輪郭部が変形してしまうので拡大 → 縮小の図形融合により仏像領域を推定する⁶⁾。処理過程の概要を以下に示す。

* CT 値 f は物質 t の X 線吸収係数 μ_t と水の吸収係数 μ_w と装置固有の定数 K を用いて次式で与えられる⁸⁾。 $f_t = \frac{\mu_t - \mu_w}{\mu_w} \times K [HU]$

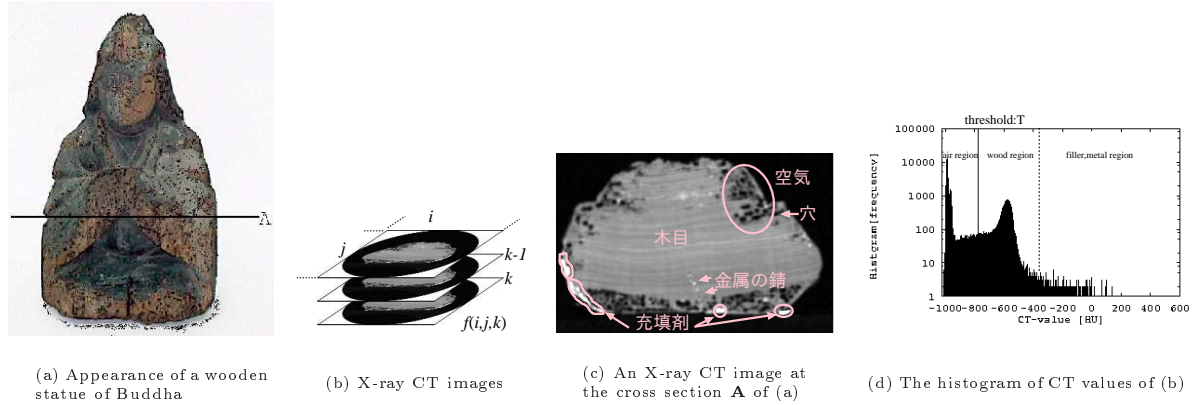


図 2 仏像の概観と X 線 CT 画像
The appearance of a wooden statue of Buddha and a X-ray CT image

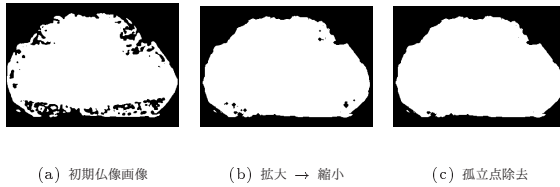


図 3 仏像領域の推定例
An example of estimation of Buddhist region

仏像領域推定処理

入力：X 線 CT 画像 $f(i, j, k)$

出力：仏像画像 $h(i, j, k)$, $(i, j, k) \in Z^3$

Step1 初期仏像画像の決定

CT 画像の 2 値化処理により，初期仏像領域を抽出する (図 3(a)).

Step2 外部と連結した虫食い穴の融合

初期仏像領域に対し拡大 → 縮小の図形融合を行ない，背景と連結した穴を埋める (図 3(b)).

Step3 仏像領域内部の孤立点の除去

step2 で融合出来なかった内部の空気領域を除去し，仏像領域を推定する (図 3(c)).

3.3 虫食い領域の抽出

上記の仏像領域推定結果を元に仏像画像内部に位置する空気領域を虫食い領域として抽出する．処理の概要を以下に示す．

虫食い領域抽出処理

入力：X 線 CT 画像 $f(i, j, k)$ と推定した仏像画像 $h(i, j, k)$

出力：虫食い画像 $w(i, j, k)$

各スライス k における虫食い領域の CT 値の閾値を T_k とし，虫食い画像 $w(i, j, k)$ を式 (1) より得て，連結する 1 の値の各かたまりを虫食い領域と呼び $C_{k,l(k)}$ と表す．ここで $l(k)$ はスライス k における各かたまり (虫食い領域) に割り当てたラベルを表す．

$$w(i, j, k) = \begin{cases} 1, & h(i, j, k) = 1 \text{ かつ } f(i, j, k) \leq T_k \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases} \quad (1)$$

3.4 3D グラフ構造抽出

仏像内の虫食い穴には閉路が存在する上，分岐規則もないため木構造による解析⁷⁾は適用できない．このため 3D グラフでノードとエッジにより虫食い領域を解析する．3D グラフ構造抽出処理の概要を以下に示す．

3D グラフ構造抽出処理⁶⁾

入力：虫食い画像 $w(i, j, k)$

出力：初期 3D グラフ $Gr^0 = (N^0, E^0) = \{Gr_1^0, Gr_2^0, \dots\}$

Step1 ノード作成

各領域 $C_{k,l(k)}$ にノード $n_{k,l(k)}$ を割り当てる．ノードの始まりを始点 n^1 とし，ノードの集合を $N = \{n_1, n_2, \dots\}$ とする．

Step2 幾何情報の取得

各 $C_{k,l(k)}$ の面積 $S_{k,l(k)} = |C_{k,l(k)}|$ と重心 $g_{k,l(k)}$ を求める．

Step3 ノードの誤抽出の削除

各ノード $n_{k,l(k)}$ の境界近傍* $B_{k,l(k)}$ を定義する．仏像領域 H に属する領域の要素数 $|B_{k,l(k)}^H|$ と背景領域 A に属する領域の要素数 $|B_{k,l(k)}^A|$ の比 $Q_1(n_{k,l(k)})$ と， $|B_{k,l(k)}^A|$ と $S_{k,l(k)}$ の比 $Q_2(n_{k,l(k)})$ を計算し，これらが設定した閾値 T_{Q_1}, T_{Q_2} 以上の時，不適切な $n_{k,l(k)}$ として削除する．閾値 T_{Q_1}, T_{Q_2} は実験により決定する．

$$B_{k,l(k)} = \{(i, j, k) \in \overline{C_{k,l(k)}} : N_m \cap C_{k,l(k)} \neq \emptyset\} \quad (2)$$

$$B_{k,l(k)}^H = \{(i, j, k) \in B_{k,l(k)} : B_{k,l(k)} \cap H\} \quad (3)$$

$$B_{k,l(k)}^A = \{(i, j, k) \in B_{k,l(k)} : B_{k,l(k)} \cap A\} \quad (4)$$

$$Q_1(n_{k,l(k)}) = \frac{|B_{k,l(k)}^A|}{|B_{k,l(k)}^H|} \quad (5)$$

$$Q_2(n_{k,l(k)}) = \frac{|B_{k,l(k)}^A|}{S_{k,l(k)}} \quad (6)$$

* $\mathbf{x} \in Z^3$ の m 近傍の点の集合: $N_m(\mathbf{x}) = \{\mathbf{y} \in Z^3 : \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\| \leq \sqrt{3}\}$

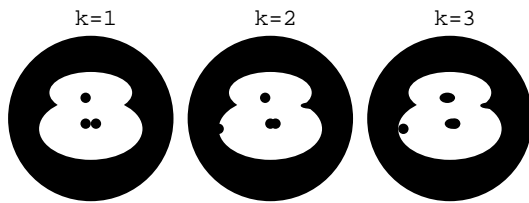
Step4 エッジ作成 (虫食い穴の連結性の抽出)

$C_{k,l(k)}$ と $C_{k+1,l(k+1)}$ の要素 (画素) が 3 次元空間で連結しているならば, エッジ $e(n_{k,l(k)}, n_{k+1,l(k+1)})$ を作成する. エッジの集合を $E = \{e_1, e_2, \dots\}$ とする.

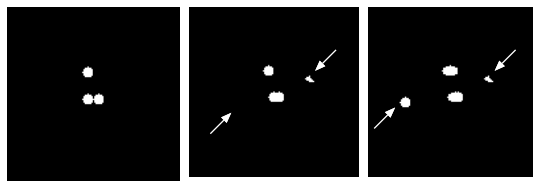
Step5 グラフ作成

グラフはノードとエッジの集合の組から成り, $Gr = (N, E)$ と表す¹¹⁾. また部分グラフの集合によって $Gr = \{Gr_1, Gr_2, \dots\}$ と表すこともできる.

3.5 初期 3D グラフ構造抽出の問題点



(a) Test images



(b) The example of gallery regions extraction

図 4 抽出誤差が発生する例
The example which an extraction error generates

仏像表面は仏像外形の凹凸と虫食い穴の表出による凹凸が混在する上, これらの大きさはまちまちである. 図形融合は融合回数により埋める凹部の大きさを変えることができるが, 大きさの違いが個々別々である仏像外形と虫食い穴の表出とを分離するのは困難である. このため, 図 4(矢印の部分) に例示するように虫食い領域の抽出処理において抽出漏れや誤抽出が生じる. これらの抽出誤りにより, その部分でのグラフ構造抽出に誤差が生じるだけでなく, 連結する, あるいは近傍のグラフ構造抽出にも誤差を生じてしまう.

初期 3D グラフ構造抽出では各ノードに対してスライス内および近傍のスライスとの関係に基づいて虫食い穴として不適切なノードの削除を行って上記の問題に対応している. しかしながら仏像外形の凹部は数スライスから数十スライスに及ぶため, 近傍との関係だけでは誤抽出したノードの削除は十分には行えない. しかも, 抽出漏れには対応できないため初期 3D グラフ構造に抽出誤りが散見される.

このため, 局所的な処理だけでなく, 大局的なグラフ構造特徴に基づいて初期 3D グラフ構造を修正することを考える.

4. 3D グラフ構造の再構築による抽出誤りの修正

初期 3D グラフのエッジ e_i とノード $n_{k,l(k)}$ の位置情報を用いて, 部分グラフを探索し, 仏像内の虫食い穴の大局的なグラフ構造特徴を基に虫食い穴の 3 次元構造として不適切な構造を修正して 3D グラフを再構築し, 抽出漏れと誤抽出を修正する手法を提案する (図 1 の後半部分). さらに, 抽出した 3D グラフにより虫食い領域の復元手法を示す.

4.1 3D グラフによる欠落ノードの復元

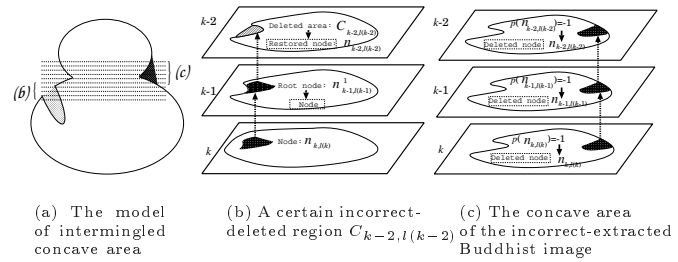


図 5 3D グラフ構造により再構築するノード例
The example of a node reconstructed according to 3D graph structure

始点ノードの抽出漏れがあると, 修復作業において充填剤を注入するのに重要な表出した虫食い穴の位置を見逃すことになる. このため初期 3D グラフで, 抽出漏れにより部分グラフ Gr_i^0 から欠落した始点ノード n^1 を復元する. 図 5(b) に再構築の必要な欠落ノードの例を示す. 図 5(b) は, ノード $n_{k,l(k)}$ の現在の始点ノード $n_{k-1,l(k-1)}^1$ が外部と連結しており, スライス $k-2$ に削除された領域 $C_{k-2,l(k-2)}$ が存在する. このとき, $n_{k-2,l(k-2)}^1$ を始点ノードとして復元する. 以下に処理の概要を示し, 図 6 に処理の詳細を示す.

3D グラフによる欠落ノードの復元

入力: 初期 3D グラフ $Gr^0 = \{Gr_1^0, Gr_2^0 \dots\}$
出力: 修正 3D グラフ $Gr^1 = \{Gr_1^1, Gr_2^1 \dots\}$

Step1 始点の位置のチェック

各部分グラフ Gr_i^0 の始点ノード $n_{k,l(k)}^1$ に対して, $|B_{k,l(k)}^A| > 0$ を判定して外と連結するノードを見つける.

Step2 新しい始点ノードの作成

もし始点ノード $n_{k,l(k)}^1$ の上に削除領域 $C_{k-1,l(k-1)}$ が存在するならば, $n_{k-1,l(k-1)}$ を復元しルートノードを変更する.

Step3 新しいエッジの作成

$n_{k,l(k)}$ と $n_{k-1,l(k-1)}^1$ の間に $e(n_{k-1,l(k-1)}^1, n_{k,l(k)})$ を作成する.

4.2 誤抽出された不要部分グラフの削除

外形の凹部による誤抽出は複数のスライスに及び, 誤抽出されたノードが他のノードと連結するなど, 誤差の影響

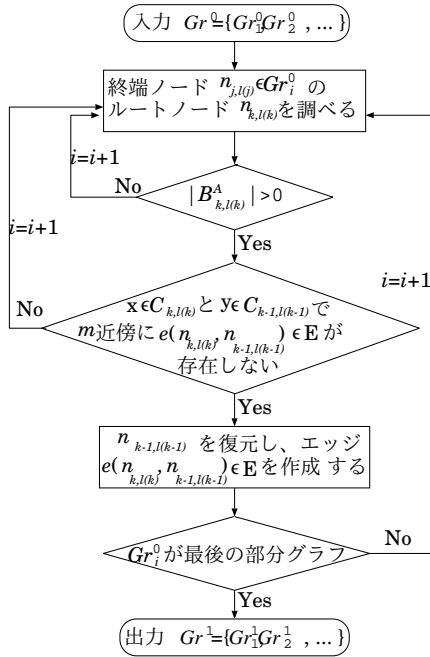


図 6 3D グラフによる欠落ノードの復元
Restoration processing of lack nodes

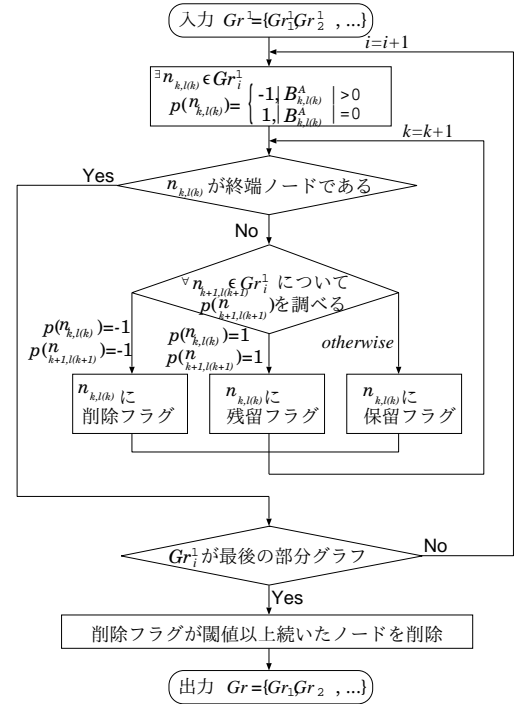


図 7 3D グラフによる誤抽出された部分グラフの削除
Deletion of the incorrect-extracted partial graph

が伝搬する。例えば図5(c)では複数のスライスにおいて形状の凹部を誤抽出しており、連結して部分グラフ Gr_i^1 を形成している。このような部分グラフ Gr_i^1 を削除するために凹部に該当する部分グラフ Gr_i^1 を探索し、誤抽出された外形の凹部だけを削除する。以下に処理の概要を示し、図7に処理の詳細を示す。

3D グラフによる誤抽出された部分グラフの削除

入力：修正 3D グラフ $Gr^1 = \{Gr_1^1, Gr_2^1 \dots\}$

出力：3D グラフ $Gr = \{Gr_1, Gr_2 \dots\}$

Step1 ノードの位置に対しフラグをつける

各部分グラフ Gr_i^1 のノード $n_{k,l(k)}$ に対し式 (7) の条件により、各ノードにフラグ $p(n_{k,l(k)})$ を付ける。

$$p(n_{k,l(k)}) = \begin{cases} -1, & |B_{k,l(k)}^A| > 0 \\ 1, & |B_{k,l(k)}^A| = 0 \end{cases} \quad (7)$$

Step2 上下のフラグをチェックする

ノード $n_{k,l(k)}, n_{k+1,l(k+1)}$ のフラグが異なればノード $n_{k,l(k)}$ に一旦保留フラグを付け、その後、上のノード $n_{k-1,l(k-1)}$ と同じフラグをつける。

Step3 部分グラフの削除

部分グラフ Gr_i^1 のノードが全て $p(n_{k,l(k)}) = -1$ の時、 Gr_i^1 を削除する。

4.3 3D グラフからの虫食い領域の復元

抽出した 3D グラフは各ノード $n_{k,l(k)}$ にノードを構成する連結成分 $C_{k,l(k)}$ の画素の位置情報も持っている。したがって、式 (8) に示すように $C_{k,l(k)}$ が持つ画素の位置を塗り潰すことで、復元画像 $r(i, j, k)$ を得ることができる (図 8)。



(a) Front view (b) Side view

図 8 グラフ構造より復元した虫食い領域 $r(i, j, k)$ を 3次元に可視化した例

The example which visualized the gallery regions restored from graph structure to three dimensions

$$r(i, j, k) = \begin{cases} 1, & (i, j, k) \in C_{k,l(k)} \\ 0, & otherwise \end{cases} \quad (8)$$

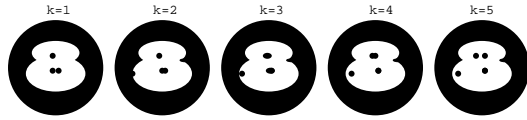
また、3D グラフのエッジ $e(n_{k,l(k)}, n_{k+1,l(k+1)})$ 情報から各ノードの重心 $g_{k,l(k)}$ と $g_{k+1,l(k+1)}$ を結ぶことで、トポロジカルな情報のみをグラフとして表現することもできる。

5. 3D グラフ構造抽出実験

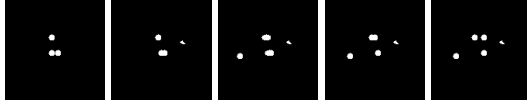
本手法により 3D グラフ構造を抽出し、結果の可視化を行う。まず抽出精度を求めるため、虫食い領域が既知であるテスト画像に対して実験し、次に CT 画像に対し実験を行った。

5.1 テスト画像によるグラフ構造抽出実験

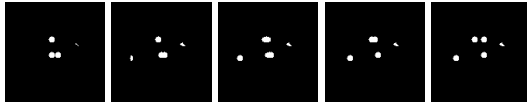
虫食い領域が既値であり、背景と連結する穴を含むテスト



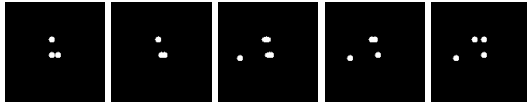
(a) Test images



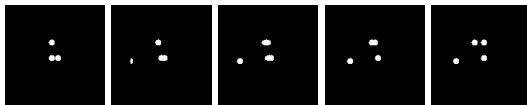
(b) The reconstructed result of gallery regions by Initial 3D graph structure



(c) The gallery regions reconstructed by restoration processing by 3D graph



(d) The gallery regions reconstructed by deletion of the incorrect extraction by 3D graph



(e) Proposed method

図 9 テスト画像に対するグラフ構造抽出による虫食い領域抽出実験結果の例
Test images and the experimental results extracted gallery regions

表 1 虫食い領域の抽出誤差

		k[slice]				
		1	2	3	4	5
虫食い領域		141	143	192	170	188
ϵ_k [pixel]	初期 3D グラフ	0	2	18	18	18
	欠落ノードの復元	5	18	18	18	18
	誤抽出の削除	0	20	0	0	0
	本手法	0	0	0	0	0

ト画像 (129×129 [pixel], 5 [slice] 枚, 図 9(a)) を CG により作成した。図 9(b) は初期 3D グラフにより虫食い領域を復元した画像, (c) は 3D グラフにより欠落ノードを復元した画像, (d) は 3D グラフにより誤抽出された部分グラフを削除した画像, (e) は復元と削除を組み合わせた本手法による画像である。初期 3D グラフで欠損した領域, 誤抽出した領域が図 9(e) では正しく抽出できていることがわかる。また虫食い領域の抽出誤差 ϵ_k を式 (9) により計算した結果を表 1 に示す。

$$\epsilon_k = \sum_{i=0}^{I-1} \sum_{j=0}^{J-1} |r(i, j, k) - \tilde{r}(i, j, k)| \quad (9)$$

ここで $r(i, j, k)$ は正解画像の輝度値, $\tilde{r}(i, j, k)$ は推定した画像の輝度値, k はスライス番号, I, J は画像サイズである。表 1 に示すように初期 3D グラフでは $k = 2$ において背景と連結した穴, $k = 2, 3, 4, 5$ において形状の凹部に誤差が生じており, 他の手法も単体で用いた場合は誤差が生じているが, 本手法は正しく虫食い領域を抽出できている。

5.2 X 線 CT 画像に対するグラフ構造抽出実験

本造仏像の X 線 CT 画像 (512×512 [pixel], 173 [slice]) に対し本手法を適用し, 虫食い穴の 3D グラフ構造抽出実験を行なった。

パラメータの決定

仏像領域を得るための閾値 T_f は予備実験から $T_f = -800$ [HU] とした。直径 3 [mm] 程度の穴を塞ぐ図形融合の繰り返しパラメータ u は, 解像度が約 0.3 [mm/pixel] であるため $u = 4$ とした。

虫食い領域の抽出結果

X 線 CT 画像に対して虫食い領域を抽出した結果の一例を図 10 に示す。(a) は X 線 CT 画像, (b) は仏像領域推定画像, (c) は虫食い領域画像, (d) は比較のため閾値処理による虫食い領域抽出結果を示す。図 10(c) において, 閾値処理だけでは抽出できなかった背景と連結した虫食い領域が仏像領域を推定することで抽出できているが, 仏像領域推定の拡大処理の影響で仏像輪郭部周辺に誤抽出 (図 10(c) の矩形で囲った部分) が生じている。

3D グラフ構造による虫食い穴の抽出実験

抽出した虫食い領域から初期 3D グラフ構造に基づいて虫食い穴を抽出した結果を図 11(a) に示す。グラフ構造に基づいて虫食い穴を抽出することにより, 上記した仏像輪郭部周辺部の誤抽出を除去できたが, 仏像外形の凹凸による誤抽出 (図 11(a) の矩形で囲った部分) は除去できていない。

次に, 本手法による 3D グラフ構造抽出による虫食い穴の抽出結果を図 11(d) に示す。初期 3D グラフ構造に基づく抽出結果 (図 11(a)) と比べると, 誤抽出が良好に除去できていることがわかる。また, 抽出漏れについても良好に修正できていることを確かめている。更に, 図 11(b), (c) に示す欠落ノードの復元, 不要グラフの削除処理のみによる結果と比べると, 本手法が復元と削除による修正処理によって 3D グラフ構造を精度良く抽出できていることがわかる。

穴の構造を詳細に見るために一部を拡大して示す。図 12(a)-(d) に CT 画像の一部, 虫食いの 3 次元画像, 3D グラフのエッジ情報を可視化した簡易的な線画, (d) は (c) のグラフ構造から復元した画像を示す。図 12 から分岐や合流のある虫食いの構造がよく分かる。特に図 12(d) のようにノード情報から $r(i, j, k)$ を復元したり, 図 12(c) のようにエッジ情報からトポロジカルな情報のみを表現することにより,

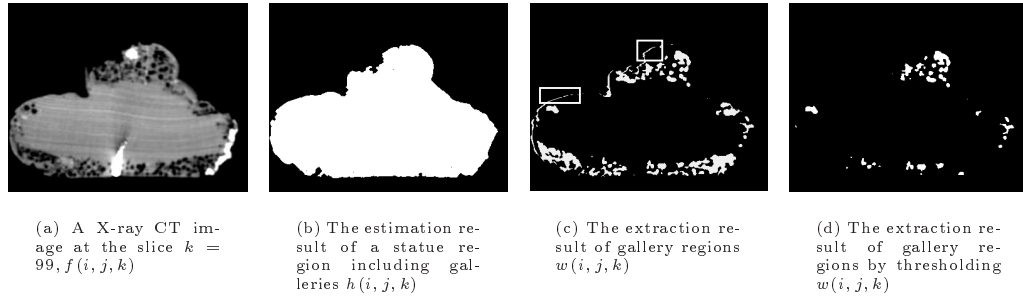


図 10 X 線 CT 画像に対する仏像領域推定例と虫食い領域抽出例 (slices of $k = 99$)
X-ray CT images and the experimental results of region estimation and the extracted results of gallery regions (slices of $k = 99$)

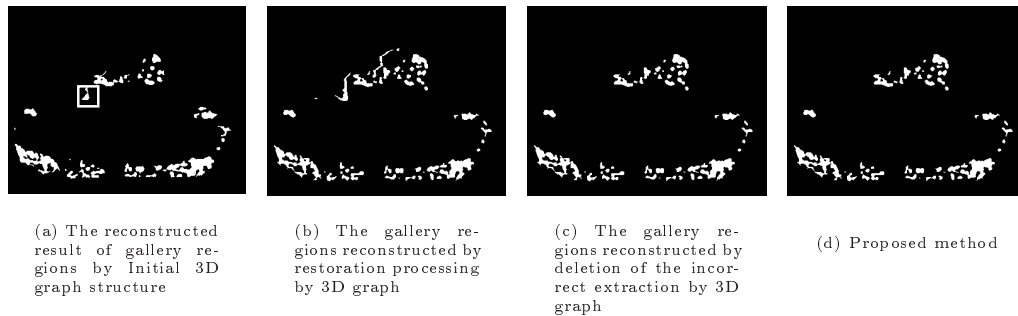


図 11 初期 3D グラフによる虫食い穴抽出例と本手法による虫食い穴抽出例 ($k = 99$)
The example of gallery regions extraction by initial 3D graph, and the example of gallery regions extraction by our method (slice of $k = 99$, $r(i, j, k)$)

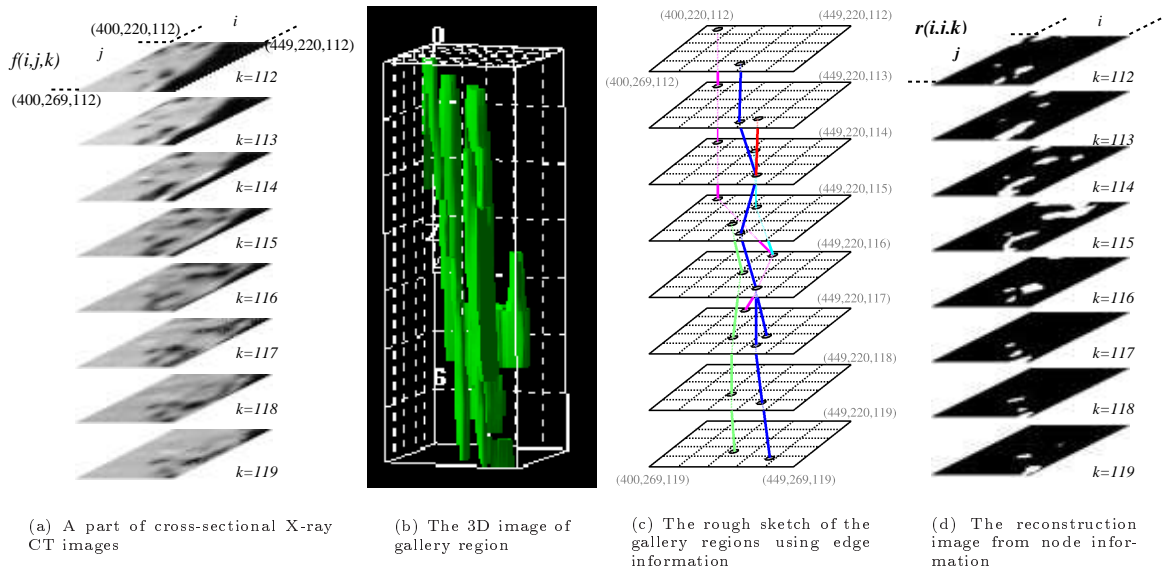


図 12 虫食い穴の 3D グラフ構造と可視化例
The graph structure and the example of visualization of gallery regions

虫食いの大きさや連結がよく見てとれる。また図 12 と同じ位置を 3D グラフにより、各分岐ごとに色分けして可視化したものが図 13(a), (b) である。図中の番号 (図 13(c)) は抽出した部分グラフのノード番号である。図 13(a), (b) により、3次元化しただけでは分かり難い分岐の位置などがよく見てとれる。

6. むすび

木造仏像の損傷のうち、最も深刻な虫食いに注目し、X 線 CT 画像から虫食い領域を 3D グラフ構造により抽出し、虫食い穴の構造の詳細な特徴を表す手法について検討した。背景と連結した虫食い領域を抽出するため、図形融合処理

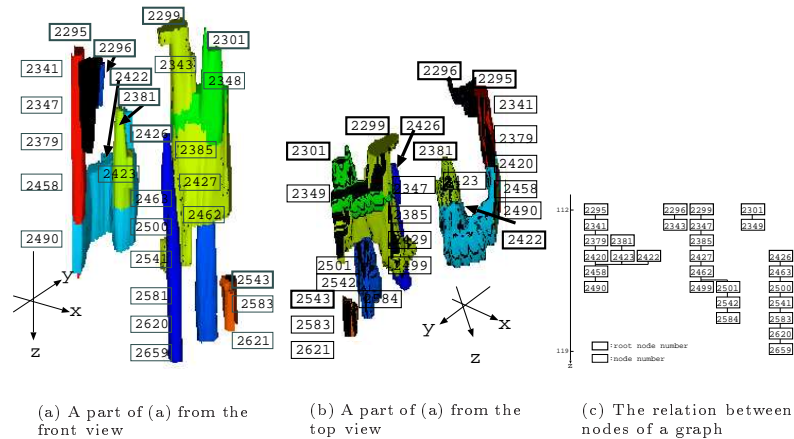


図 13 3D グラフの情報を用いて虫食い領域を分岐ごとに可視化した例
The example which visualized the gallery regions for every branch using the information on graph

の組み合わせにより仏像領域を推定し、3D グラフ構造抽出により虫食い領域抽出を試みたところ仏像の凹凸と、仏像表面に表出した虫食い穴による凹凸とが混在する為に、虫食い領域の抽出漏れ、誤抽出が生じた。このため、3D グラフ構造の大局的特徴に基づいて、虫食い構造として不適切な構造を除去する手法を与え、精度よく虫食い領域を抽出できることを示した。

抽出した 3D グラフ構造により、全体像や分岐ごとの選択的な可視化が行える。修復の担当者らによると、このような可視化により穴の分岐した枝ごとの位置関係が明確にわかるので、修復の際の適切な判断ができ、加えて修復用の樹脂の選択や修復の要、不要を決定する際に、有用であるとの評価を得ている。このように本手法は、仏師ら修復担当者の仏像の損傷の診断と、修復作業の効率化に大きく寄与するものと期待している。

今後の課題として、3D グラフ構造抽出データからの仏像の損傷の定量的な評価などを考えている。

謝辞

日頃貴重な御助言を頂きます本学宮原誠教授、浅野哲夫教授に深謝致します。また、本研究の仏像の検査のため、X 線 CT データを撮影して頂いた東葛テクノプラザ研究開発室の細谷昌裕氏、金沢大学医学部放射線科の小林健氏、放射線技師の辻井秀夫氏に深謝致します。

【文 献】

- 1) 長澤市郎, 稲葉政満: “木彫文化財の修復への放射線利用”, 放射線と産業 Radiation & Industries, Vol 56, pp.4-8, (1992)
- 2) 岩崎 友吉: “文化財の保存と修復”, NHK ブックス, (1977)
- 3) 西岡 常一: 松久朋琳, 青山 茂: “木のこころ仏のこころ”, 株式会社春秋社, (1996)
- 4) 三浦定俊, 本間紀男, 馬淵久夫: “X 線断層撮影による仏像の調査”, 計測自動制御学会論文集, Vol 16, pp.239-244, (1980)
- 5) 三浦定俊, 藤井正司: “高エネルギー X 線 CT スキャナによる金銅仏の調査”, 古文化財の科学, Vol 32, pp.40-46, (1987)
- 6) 岩本純子, 剣持雪子, 小谷一孔, 長澤市郎: “木造仏像の X 線 CT 画像からの虫食い領域の 3 次元グラフ構造抽出”, Research Report of JAIST, IS-RR-2003-016, ISSN 0918-7553, (2003)
- 7) 井関文一, 小畑秀文, 大松広伸, 柿沼龍太郎: “胸部 CT 画像からの気管支 3 次元木構造の抽出の一手法”, 信学論, D-II, Vol.J80, No.10, pp.2841-2847, (1997)
- 8) 福田 寛: “放射線技師のための物理学”, pp234-235, 東洋書店, (1996)

- 9) 鳥脇純一郎: “画像理解のためのデジタル画像処理 (II)”, 昭晃堂, (1988)
- 10) 長谷川 純一, 森 健策, 鳥脇 純一郎, 安野 泰史, 片田 和廣: “3 次元デジタル画像処理による CT 画像からの肺癌候補領域の自動抽出”, 信学論, D-II, Vol.J76, No.8, pp.1587-1594, (1993)
- 11) 浅野哲夫, 増沢 利光, 和田 幸一, “アルゴリズム論 IT Text”, オーム社, 2003.

いわもと じゅんこ
岩本 純子 2000 年 3 月 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了。現在 同大学院 博士後期課程在学中。X 線 CT 画像解析の研究に従事。

こたに かずのり
小谷 一孔 1983 年長岡技術科学大学修士課程修了。同年日立製作所家電研究所に勤務。1990 年長岡技術科学大学博士課程修了。同年同大学工学部助手。1991 年同助教授。現在、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科助教授。工博。画像の高効率符号化、表情解析、CG の研究に従事。電子情報通信学会、映像メディア学会、日本顔学会各会員。

けんもち ゆきこ
剣持 雪子 1993 千葉大・工・情報工卒。1998 同大学院自然科学研究科博士課程了。工博。同年より北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科助手、その間、2000 - 2002 仏国 ESIEE 客員研究員。2003 より岡山大学工学部情報工学科講師、現在に至る。離散幾何学・離散位相幾何学のアプローチによるデジタル画像解析の研究に従事。情報処理学会、IEEE 会員。

ながさわ いちろう
長澤 市郎 1962 年東京芸術大学専攻科卒業、東京芸術大学美術学部保存修復技術 (彫刻担当) 1980 年講師、1988 年助教授、1995 年同大独立専攻文化財保存学教授。彫刻文化財の保存修復に関する研究に従事、文化財保存修復学会会員、IIC, IIC Japan 会員, ICOM-CC, ICOM Japan 会員。